

IEEJ アウトルック 2025 に関する OPEC での意見交換

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

11月11日、ウィーンのOPEC事務局において、「10th Technical Meeting on Asian Energy and Oil Outlook」と題する会議が対面方式及びオンライン方式のハイブリッドで行われた。小論「国際エネルギー情勢を見る目 (610号)」に記した通り、この会議は2015年に現在の形式で始まったものだが、その前身は1987年に実施された最初のOPECと弊所の会議に始まる定期的な意見交換会に遡る。今回の会合は、OPEC事務局の幹部や同加盟国などからの参加者に加え、日本、中国、韓国などの専門家などが参集し、「チャタムハウスルール」の下で、会議の表題に示されるテーマに沿って、活発な意見交換が実施された。

本会議の最初のセッションにおいて、OPECの最新の長期エネルギー需給見通し、「World Oil Outlook (WOO) 2024」と、弊所の「IEEJ アウトルック 2025」(以下、アウトルックと略)のプレゼンテーションと興味深い議論が行われた。また、第2セッションでは、脱炭素化に向けたエネルギー転換の中で世界的に注目が集まっている、CCS、CCUS、そしてネガティブエミッション技術(NETs)に関わる問題について、日本、中国、韓国などでの取り組み動向について各国の専門家から報告が行われ、さらにCCS問題の専門研究機関の研究者からの報告もあり、この問題にフォーカスした議論が行われた。以下では、「チャタムハウスルール」に基づく会議であるため、アウトルックに関する議論において示された問題関心を中心に、筆者の所感ということで、今回の意見交換における重要なポイントを整理することとした。

弊所アウトルックでは、①現状の趨勢が持続すると想定する「レファレンスシナリオ」と②脱炭素化とエネルギー安全保障強化のためエネルギーの先進技術が最大限導入されると想定する「技術進展シナリオ」の2つについて、2050年までの世界のエネルギー見通しが提示されている。アウトルックの特徴やポイントについては、小論「国際エネルギー情勢を見る目 (711号)」を参照されたいが、様々な前提を置いて将来を分析する「フォアキャスト」あるいは「見通し」であるところに特徴がある。また、本年のアウトルックでは、①今後のエネルギー転換におけるLNGの役割や重要性についての分析、②今後の国際エネルギー情勢を見る上での5つの重要なエネルギー安全保障リスクに関する分析、の2つの重要トピックをハイライトした分析などを行っていることも大きな特徴となっている。(なお、その他にも、自動車のGHG排出に関するライフサイクル分析を始め、4つの特別「BOX分析」を実施している点もアウトルックの大きな特徴である。)

上述の主要なポイントを整理した本年のアウトルックに関するプレゼンテーションを筆者が実施したが、それに対する意見交換を通して、以下の重要な問題関心を所感として受け取るようになった。まず第1には、改めて国際エネルギー情勢におけるアジアの重要性を確認したことを挙げたい。そもそも本会議はその表題が示す通り、アジアのエネルギーの見通しに焦点を当てたものである。アウトルックでは、今後の世界のエネルギー需要の増加の中心となるのがインドとASEANであることが強調されているが、この点は意見交換における最も主要な共通認識であったとあって良い。また、需要増加に関しては、牽引役をインドやASEANに譲り、むしろ長期的には減少に向かうことになるものの、中国の国際エネルギー情勢における存在感の大きさは引き続き圧倒的なものがある。これは需要

水準そのものの絶対的な大きさが重要であり、かつ減少する場合の需要水準の変化のインパクトの大きさも世界の関心事となるからである。さらに、世界の分断が深刻化する中で、クリーンエネルギー製造能力や重要鉱物のサプライチェーンにおける中国の際立った供給シェアの高さなども見逃せないポイントである。こうして、アウトルックの中に示されているアジアの重要性は、今回の意見交換の中で改めてハイライトされることとなった。

第2に、化石燃料の役割と将来のリスク要因としての過少投資問題への高い関心が存在したことを挙げたい。弊所アウトルックでは、技術進展シナリオにおいても、2050年時点で世界の一次エネルギー供給の中で化石燃料が54%のシェアを占める見通しとなっており、現状からシェアは低下するものの、世界のエネルギー供給の大宗の位置を保ち続ける将来像となっている。ちなみに、OPECのWOOでは、特に石油需要の見通しは総体的に見て弊所アウトルックよりもさらに強気あるいは楽観的といえるものとなっている。2050年に向けたエネルギー転換の過程においても、引き続き化石燃料は重要なポジションを占める将来像が描かれていると言っても良い。その中で、本年のアウトルックで重要トピックとして取り扱った、5つのエネルギー安全保障リスクの一つ、化石燃料の過少投資リスクについて、その重要性を指摘する議論が行われたことは興味深かった。

アウトルックでは、石油・ガス・LNGにおける既存の供給能力が自然減退進展にそのまま委ねられた場合の供給低下と需要水準の間に生じる巨大なギャップを提示し、適切な投資実施が必要となることを示している。この点、特に既存能力の減退という重要な視点をアウトルックが明確に提示していることについて高く評価する意見を聞くことができた。また、もう一つ筆者にとって興味深かった点は、過少投資によって需給逼迫が発生し、市場不安定化と価格高騰が発生する場合、最も大きな打撃を被るのが所得の低い国や社会層であることをアウトルックが論じていることに対する関心の存在であった。長きにわたるエネルギー転換を着実に、スムーズに進めていく上では、化石燃料分野への適切な投資を実施していくことが重要であることを改めて共通認識として確認することとなった。

第3に、CCS、CCUS、NETsへの高い関心を今回の意見交換を通して実感することになったことを挙げたい。この点は、弊所アウトルックの中で、将来のCO2排出削減の重要な柱の一つとして、CCS、CCUS、NETsによる貢献を取り上げていることについての評価・関心からも感じたが、そもそも、今回の意見交換におけるセッション2が、その問題に特化した議論を行う形になっていることから認識することができた。化石燃料が一定の役割を果たし続ける中で、あり得べき対応オプションとしての関心が高まっていること、長期的に大幅な排出削減を実施していく上ではNETsなどの革新的技術がどうしても必要になると考えられていることなどが、この問題への関心を高める背景要因となっている。さらに、今回の意見交換を通じて、エネルギー転換にはあらゆる技術やオプションの総動員が必要となり、その文脈において、CCS、CCUS、NETsにも包括的・総合的な観点から適切に光を当てていくことが必要である、との問題意識を感じることもできた。アジア各国においても、それぞれの事情に応じて、CCS、CCUS、NETsへの取組み強化が現実化している。再エネ、原子力、クリーン水素などへの取組み強化の動きと共に、この分野における今後の政策動向や技術革新に注目していくことが必要となろう。

最後に、もう一つ関心深かったのは、省エネの重要性に関する意見交換であった。弊所アウトルックでは、省エネ機器の「ストック効果」に着目して、長期的に省エネが推進されていく将来像を描いている。この省エネ推進が、CO2排出削減でも最も主要な貢献を行うことが分析されているが、今後どの分野で具体的にどれだけ省エネが加速しうるのか、について強い関心が示された。本年のアウトルックでは、改めて省エネを深掘りしたことが一つの重要な特徴になっているが、図らずもそれを見抜いたかのような洞察力に富む問題関心に接することになったことは筆者の印象に強く残ることとなった。

以上